
スーラシア王国戦記

4423

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スーサン・アーヴィング

【Zコード】

Z2747Y

【作者名】

4423

【あらすじ】

「よく普通の日本人、三条翔は死期を悟った。なぜかって、トラックが自分めがけて突っ込んできたからだ。そして死んでしまった。そして目が覚めたら・・・赤ん坊になっていた！！」。

不幸なことに死んでしまった主人公が魔法のあるファンタジーてきな世界に転生しがんばる話。

第1話 誕生（前書き）

初投稿です。誤字脱字などがあるかも知れませんが、温かい目で見守ってください。

第1話 誕生

俺、二条翔は終わったなと思った。トラックが自分めがけて突っ込んできたからだ。
「今思えば短い人生だったな」

体に衝撃が走った。そして・・・。

アオギヤアオギヤアオギヤアオギヤアオギヤア

あれ？ 生きてるぞ。俺死んだんじゃなかつたのか？ それにしてもおれはなぜ泣いている？

「産まれましたよ！ 元気な男の子様です」

で我がブラシア公爵家も安泰だ

「ヒルダあなた、この子の名前はライトといのはどうですか」

子の名前はライト、ライト・ブラシアだ！！

何の話をしているんだ？ というかだんだん眠くなつてきて・・・。

「んにちは。二条翔です。ここはどうやら地球とは別の世界に転生したようです。なぜそんなことがわかるかつて？ 月が2つあるのと、俺の両親の会話からこここの世界には魔法があるということがわかったからだ。魔法と聞いて俺は両親に教えてくれと頼み込んだがダメだった。普通は10歳からだからそうだ。それでも俺はあきらめ切れなくてねばつたら、5歳になつたら教えてくれるように約束することに成功した。こここの世界での俺の

容姿は金髪で、顔はかなり整っているから、将来かなりのイケメンになると思う。俺の家は公爵家というだけ広く使用人が多く金持ちだ。この家に生まれてよかつたと思う。ちょうどその時ドアがあいた。

「坊ちやま、公爵様がお呼びですよ。」

つたのは俺専属メイド、ヒルシアだ。前に年を聞いたりすこい顔で怒られた。どうやら女性に年を聞くのは失礼なことらしい。

「はーい。今行くよ

たぶん前に頼んだ、書庫のことについてだろ?。こここの世界の字はすでに覚えることができたので、難しい本を読みたくなってきたからだ。生前の趣味は読書だったからね。

うちに父上のいる書斎に着いた。

「父上ライトです。入ってもよろしいですか」

「ああ。

「ここでの父上の説明をしておこう。名前はネルソン・ブラシアといい、ブラシア公爵領の領主だ。無口だけど優しい俺の父親だ。あとから聞いた話だけれど、ものすごくつよいらしく、魔法で津波を作つて敵軍3万をあらいながしたそうだ。それで王宮から授けられた2つ名は、大津波のネルソン。今は知らない人はいないそうだ。

「ライト。お前はもう

字を読めるようになったのか?まだ3歳なのにか?」

「はい。難しい字はまだ読めませんが絵本はすべて読んでしまいました。もつと難しい本を読みたいので書庫に行く許可をください。」

「ふむ。まあいいだろ?。明日から自由に

書庫に入つていいぞ。だがお前専属メイドとこつしょに入るところ
条件付だがそれでもいいか?」

「はい。ありがとうございます。」

やつた!。これで明日からこの世界のことを調べられるが。明日
が楽しみだな。

第1話 誕生（後書き）

こんなものをよんでもくれてありがとうございます。次回はライト君の世界について詳しい説明を設けます。

第一話 書庫にて

昨日、父上に書庫に入る許可を得た俺は朝早くからエルシアといつしょに書庫に向かっていました。「本当にライト様はすごいですね」

本当に尊敬したよつの声でいうエルシア。

「ん? なんでだい? 僕何かしたつけ?」

「だってライト様は3歳なのに字が読めるですよね。私なんか絵本でも大変なくらいなのに。」「え?。なんで読めないの?」

「当たり前じゃないですか。私は平民ですよ。多少字が読めるだけいいほうです。」「ふーん。ここは教育が行き届いていないのか・・・。いつか学校でも建てるようこ父上に進言してみようかな。」

そういうふうして

ているうちに、書庫にたどり着いた。

「あれ? ドアの鍵が開いてる。まあいいか。開けますよ。ライト様。」「ギィー」と音を立ててドアが開いた。

「うわあー

俺は

思わず声を上げてしまった。さすがは公爵家、ものすごい大きさと本の量だな。

あれは・・・奥様! -

「母上! -

「あら。ライトも本を読みに?。」

やつぱり私とエルソンの子だわ。

そういったの、エルザ・ブラシア俺の母親だ。かなりの天然だが、

どうやら父上が頭の上がらない数少ない人だそつだ。

「はい。本を読みにきました。」

みだわ。私には気にせず読んでね

「はい。」

さて何を読もう。やつ

ぱり地理からかな。よし、地理からにしよう。うーん、どれがいいかな。まあいいやこれにしよう。

「じゃあこれを読むから

エルシアは終わるまで待つてくれないか

りました。」

さて、ついでに俺が今この時点知っている地理について話そう。我がブラシア公爵家はスー・ラ・シ・ア王国と国に属している、それだけだ。ほかにも宿敵レサロゴ皇国や、同盟国のレッサ王国、スー・ラ・シ・ア王国の国教のラミア教の總本山、神聖ラミア皇国などの国を知っているだけだ。結構知っているじゃないかと思うかも知れないが、自分の国がどの位置にあるのかさえ知らないのだからかなり重症だ。さてて読むか。

私、エレミアです。ライト様に待っていてくれといわれたけどどうしよう・・・。そうだ！！失礼ながらライト様でも觀察しようかしら。それにしてもライト様つてイケメンよね・・・将来、絶対女の子にモテると思つわ。そういうじているうちにもう自分の世界に入り込んでいるわね・・・。

10分経過　　エレミアはずつとライトの顔を見てい

た。

30分経過

ヒューリアは多少体を動かしながらもライトの顔をみていた。

1時間経過 ヒューリアはあくびをした。

1時間 3

0分経過 ヒューリアはうとうとし始めた。

そして・・・。

「ふう。」

地理は、だいたいわかつたな。簡単にまとると・・・。

1スー・ラ・シ・ア王國はフォード大陸の上空のスー・ラ・シ・ア島などからなる浮遊列島からできている。字のじとく浮いている。

2浮いているために攻められにくく、大量の飛空艇を持つてゐるため軍事力の面では世界有数だが、高所にあるため作物の自給率が悲惨なことになつてゐる。

3フォード大陸に領土をもつてゐるが、それでも食物自給率は30%程度である。
4魔法先進国で、魔石やマジックアイテムや魔法の秘薬が主な輸出品である。

5ほかにも牧畜が盛んだつたりする。といふかそれくらいいしかやることがない。

6レサローナ皇国は海運の国で大量の富を稼いでいるが食料自給率はスー・ラ・シ・ア王國と同じ悩みをもつてゐる。

7レッサ

王国は魔法後進国でスー・ラ・シ・ア王国の商売客。

こんな感じ。

そ

るやう遅くなつてきたから帰らつかな。

「エレシア。」

ん？返事がないな・・・。って寝てるな・・。エレシアは「ひじ
て至近距離からみるとかなりかわいいな。むつ胸も結構大きい・。
つていかんこんなことを3歳児が考へては。まずはエレシアを起
さなくては。

「エレシア起きて。」

「ふえ？」

「ほり早く起きて。」

「あつライア様。すみません」

「行け。エレシ

ア。」

「はい。」

明日はなにを

読もうかな。

第一話 書庫にて（後書き）

次回はいつもの5歳になります。次回もよろしくお願いします。

第3話 魔法訓練／契約

俺はこの日を待ちわびていた。そうー今日は俺の5歳の誕生日。魔法が習える日だ。

です。」「ライト様。公爵様がお呼び

そういうてエレシアが入つてきました。

「ああ。今行くよ。」

楽しみだな。

「失礼します。父上。」

「ああ。ライト。

この方が今日からお前に魔法を教えてくれる二一ズ殿だ。ついでに乗馬と剣術もおしえてもうえ。」

「え？ 乗馬と

剣術もですか？」

「ああ。乗馬は5歳からやるものだからな。

剣術は・・・ついでだ。」

「初め

まして、ライト様。私の名前は二一ズ・ボルベック今日からあなたの講師です。できればボルベック先生と呼んでくださればうれしいです。」

こちらこそ初めてボルベック先生。これからよろしくお願ひします。」「ではさつやくはじめましょう。

危険ですので庭に移動します。」

移動中～

「ところでライト様。魔法についてどれくらい知っています

か？」

「はい。魔法使いはランク0～9に分類され、ランク0は非魔法使い、1～3は低級魔法使い、4～6は中級魔法使い、7～9は上級魔法使いにそれぞれ区別されています。また低級魔法使いに使えるものは魔力操作と風・火・水・土の四大元素の魔法です。中級になると火を発達させた熱、水を発達させた氷、風を発達させた雷、土を発達させた乾燥つといった魔法を使えるようになります。上級になると闇と光属性があつかえるようになります。どうですか？」

「その通りです。よく勉強しましたね。おっと、そういううちに庭に出ましたね。さっそく訓練を始めましょう。」

訓練開始

「ではライト様ではこれを。ライト様の杖です。」

指輪というのは古代の魔石がうつめこまれていて、魔力をあつめるのに必要なもので杖というのは魔力を放つのに必要なものだ。

「あれ？ この杖かなり大きい気がするけど。普通このくらいなんですか？」

「ああ。杖は短い杖ワンドと長い杖スタッフの二種類があつてこれは長い杖スタッフのほうです。公爵様いわくブラシア公爵家はだいだいこれだそうです。」

「ふーん、そうなんだ。」

「さあ、ライト様。この杖と指輪に第一の魔法、契約の魔法記号すなわちあなた魔法名を刻んでください。」

性の魔石をわたされる。魔法記号というのは魔力語を刻むことによつて魔法の効果を永久的に持続させる技術で契約というのはその初

そういうて万能

歩で使い魔や杖、指輪などに刻む。ゆいつ魔力を使わない魔法だ。ついでに魔法名というのは魔法使いがそれぞれ持っているもので一部の魔法を使うのに必要なものだ。以上説明終わり。

僕の魔法名は何ですか？」

「ああ、サージュです。覚えておいてください。」

俺は杖と指輪

にサージュと魔法語で書き込む。

「これでいいですか？」

「はい。では始めましょう。」

こうわけで俺の魔法訓練が始まった。

第3話 魔法訓練／契約（後書き）

ライト君の魔法名はサーデュです。覚えておいてくださいね。次回は本格的に魔法訓練がはじまります。次回もよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2747y/>

スーラシア王国戦記

2011年11月20日03時20分発行